

大阪大学外国語学部 ベトナム語専攻紹介



海外交流

清水政明*

Vietnamese Section, School of Foreign Studies, Osaka University

Key Words : Vietnamese, Sino-Vietnamese, Lingua franca

1. ベトナム語専攻の概要

ベトナム語専攻では、現在3人の専任教員、1人の特任教員、並びに2人のネイティブ非常勤教員という体制で各学年18人前後の学生のベトナム語教育に当たっています。1、2年生の間はベトナム語の学習に集中し、3年生からゼミに参加、4年生になるとベトナム語で卒業論文を書くこととなります。4年間のカリキュラムは、最終的にベトナム語で卒業論文を書くことを目標に組み立てられており、交換留学の相手校にもそれを踏まえた教育を提供するように配慮して頂いています。

外国語学部及び言語文化研究科が部局間学术交流協定を結ぶベトナムの大学は、ハノイのハノイ大学(前ハノイ外国語大学)、ハノイ師範大学、ホーチミン市のホーンバーン国際大学、ホーチミン市師範大学の4校で、個々の学生のニーズに合わせた多様な選択肢が用意されています。大学での勉学以外に特に課外活動にも積極的に参加することが奨励されており、例えばプロの漆絵画家に弟子入りする学生(写真1)、ベトナムの国語字(ローマ字)書道に本格的に取り組む学生、またそれを卒業論文のテーマとする学生もいます。教員による国際交流も盛んで、例えばハノイ国家大学人文社会科学部文学部漢字・字喃部門での毎年恒例の集中講義などは、正規の授業科目「越南漢字音」を外国人である筆者が受け持



(写真1: 漆絵画家に弟子入りする学生)



(写真2: ハノイで行う集中講義の様子)

つという異例の交流とも言えるでしょう(写真2)。

我が国で本格的なベトナム語教育が始まったのは、ベトナム戦争が激化し日本におけるベトナムへの関心が高まった1960年代後半のことです。60年代初頭に当時のサイゴンに身を置く機会を得た先駆的研究者によって、まず1964年に東京外国語大学、次いで慶應義塾大学でベトナム語の講座が開設されます。その後、1977年にそれら先駆者達に師事した現専攻長である富田健次教授が、大阪外国語大学外



* Masaaki SHIMIZU

1967年1月生
京都大学大学院人間・環境学研究科博士
後期課程研究指導認定退学(1999年)
現在、大阪大学大学院言語文化研究科
准教授 人間・環境学修士
ベトナム語学
TEL: 072-730-5282
FAX: 072-730-5282
E-mail: qingshui@lang.osaka-u.ac.jp

国語学部タイ・ベトナム語学科ベトナム語専攻の開設に伴い初代教員として着任されました。その後、90年代以降になって陸続と様々な大学でベトナム語の講座が開かれますが、主専攻としてベトナム語を専門的に教育する機関は依然として東京外国語大学と大阪大学外国語学部に限られます。

2. ベトナム語の概要

上でも触れたように、大阪外国語大学時代には、当初ベトナム語専攻はタイ語と共にタイ・ベトナム語学科の一部として存在していました。しかし、タイ語とベトナム語は系統的に異なる言語とされており、タイ語はシナ・チベット語族シナ・タイ語派、ベトナム語はオーストラアジア語族モン・クメール語派にそれぞれ属します。しかし、実際にはタイ語とベトナム語の間には文法、語彙等の面で大いに共通する部分があります。現在ベトナム語には「声調」と呼ばれる音声的特徴があり（正書法上6種が区別されます）、意味を持つ最小単位である「音節」に高低・昇降の音調が付与されます。しかし、ベトナム語の最大の特徴とも言えるその声調が元来ベトナム語には存在せず、タイ語や中国語との接触の過程でその発生に拍車がかかったと考えられています。このようにベトナム語は歴史上様々な大国の言語の影響に晒され、その度に変化を余儀なくされましたが、中でも中国語とフランス語のそれは特に大きかったと言えるでしょう。現在のベトナム北部の地は紀元前より紀元10世紀まで中国の支配下に置かれ939年に独立したとされますが、独立後も王朝は中国的儒教国家の建設に邁進しました。その結果、日本語同様夥しい数の漢語が今も使われ続けています。我々日本人にとっては、ベトナム語を学ぶ際共通の漢語を通じて飛躍的に語彙の習得率が上がりますが、中には *tiến sĩ*（漢字：進士、意味：博士）、*bác sĩ*（漢字：博士、意味：医者）等、注意を要する例も少なくありません。

3. 日本人とベトナム語

さて、日本ベトナム交流史の観点から、日本人がかつて触れたベトナム及びベトナム語について紹介したいと思います。最も古い時代にベトナムへ赴いた日本人として知られるのは「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山にいでし月かも」の詩で知られ

る阿倍仲麻呂です。遣唐留学生として唐に赴いた阿倍仲麻呂は蘇州からの帰国途中、船が難破しベトナム中部の驩州に漂着します。友人であった李白は仲麻呂死亡の噂を聞き「哭晁卿衡」の詩を詠みました。その後、唐の官吏となった仲麻呂は、再度節度使として安南都護府（現在のベトナム北部）に赴いたと言われます。いずれも8世紀の出来事です。時代は下って17世紀、朱印船貿易の時代になると、ベトナム中部の広南阮氏は、北部の鄭氏に対抗するために関税から収入を得る外国貿易を奨励し、今のダナン（Tourane）、ホイアン（Faifo）の地を貿易港として開放しました。それをきっかけに朱印船が往来し「日本人町」が成立しますが、中国清朝の鎖国政策のため、日本と中国がこの地で出会取引を行いました。よってホイアンの地では恐らくベトナム語、中国語、日本語の少なくとも3つの言葉が飛び交い、その中で「通商語」（Lingua franca）が形成したのと思われます。後の鎖国時代、例えば常陸国（今の茨城県）の沖合で難破し漂流した日本船がベトナムに漂着した例が江戸時代の対外関係史料集『通航一覽』に見え、その際見聞されたことが『安南國漂流物語』としてまとめられますが、そこには漂流民が聞き取ったベトナム語がカタカナで表記されています。中には独特の語順を有する表現が見え、恐らくそのLingua francaの名残を示すものと思われます。同じ頃、長崎に来航する唐船の乗組員達の通訳に当たった「異国通事」の中でもベトナム語の通事に当たった「東京通事」の存在が知られますが、彼らが使った教科書にも中国語とベトナム語の入り混じった何とも不思議な言語が記されており、当時の複雑な言語状況を知らしめてくれます。18世紀末から19世紀初にかけて、外国通として知られる幕臣近藤重蔵が中国等の文献を駆使して『安南紀略藁』という書物を著しますが、そこには当時知りうるベトナムに関するあらゆる情報が盛り込まれています。そこにもやはりベトナム語に関する情報が、中国明代に編纂された『安南訳語』に基づき記述されています。

このように歴史上何らかの形で日本人が見聞したであろうベトナム語は、決して純粋なベトナム語だけではなく中国語や日本語と入り混じった複雑な様相を呈するものもあったということを指摘しておきたいと思います。

最後に李白が阿倍仲麻呂の死を悼んで（実際には生きていたが）詠んだ詩「哭晁卿衡」をベトナム式の発音で読んだものをベトナム語のローマ字正書法

で記してみたいと思います。ベトナムでは漢詩を読み上げる際、決して日本のように読み下し文にすることなく、「音読み」のままで読み上げます。

哭晁卿衡

李白

日本晁卿辭帝都
征帆一片遶蓬壺
明月不歸沈碧海
白雲愁色滿蒼梧

Khốc Triều Khanh Hành

Lý Bạch

Nhật Bản Triều Khanh từ đế đô
Chinh phàm nhất phiến nhiêu Bồng Hồ
Minh nguyệt bất quy trầm bích hải
Bạch vân sầu sắc mãn Thương Ngô

